

感染症媒介蚊の生息状況調査(2024年度)

矢澤 俊輔 吉田 琴羽 佐賀由美子 鳶田 嵩久
谷口 咲羅 福山 圭 板持 雅恵 谷 英樹

Distribution of Mosquitoes in Toyama Prefecture in the Fiscal Year 2024

Shunsuke YAZAWA, Kotoha Yoshida, Yumiko SAGA, Takahisa SHIMADA,
Sara Taniguchi, Kei FUKUYAMA, Masae ITAMOCHI, and Hideki TANI

蚊媒介ウイルス感染症には、デング熱、チクングニア熱、ジカウイルス感染症、日本脳炎、ウエストナイル熱などがある。国内では、毎年少数ではあるが日本脳炎の国内発生が報告されている他、デング熱やチクングニア熱などの輸入症例が継続的に報告されており、特にデング熱の輸入症例は近年増加傾向にある [1]。2014 年には、デング熱の国内感染症例が69 年ぶりに発生し、最終的に162 例が報告された [2]。2019 年にもデング熱の国内感染4 症例が発生した [3]。国内にも広く分布するヒトスジシマカ *Aedes albopictus* によって媒介されるデング熱、チクングニア熱、ジカウイルス感染症は、ヒト→蚊→ヒトの感染環を持つため、散発例に止まらず地域流行する恐れがあり、重点的に対策を行う必要がある。

今回、デング熱などの蚊媒介感染症対策の基礎資料とすることを目的に、蚊の発生活消長を調査した。なお、これまでの調査結果などから県内の観光地において蚊媒介感染症の地域流行が起こるリスクは低いと考えられたため、今年度は観光地における蚊の生息状況の調査は実施しなかった。

材料と方法：2024 年5～10 月に月3 回、太閤山

ランド（富山県民福祉公園、富山県射水市）で調査を行った（図1）。蚊の捕集は、CDC ライトトラップ512 型（John W. Hock 社製）の豆電球を外して吸引トラップとして用い、誘引源のドライアイス約1 kg と共に地上約1～1.5m の高さに設置し、一晩作動させて行った。このようにして得られた蚊類を、検査室にて分類・計数した。

結果：太閤山ランドにおける種別捕集数を表1 に示した。388 匹の蚊が捕集され、4 属5 種（種未同定のイエカ属 *Culex. spp.* を含む）に分類された。過去の調査では過半数を占めていたヒトスジシマカは、今年度の捕集割合は29.1 % であり、2020 年以前より少なく、昨年と同程度であった。太閤山ランドにおける2024 年のヒトスジシマカの発生は5 月中旬から10 月下旬にかけて観察された。ヒトスジシマカが多数捕集された期間は、9 月中旬であった（表2、図2）。

太閤山ランドにおける2018～2024 年のヒトスジシマカ雌成虫の捕集数の推移を比較すると、2024 年の捕集数が多くなる時期は9 月中旬であり過去の調査と同程度の時期であった。ピーク時の捕集数は、昨年同様、2020 年以前の調査と比較



図1. 蚊の生息状況調査地点

表1. 太閤山ランドにおける蚊の種別捕集数

種	捕集数(匹)			捕集割合(%)
	♀	♂	小計	
ヒトスジシマカ	113	0	113	29.1
ヤマトヤブカ	4	0	4	1.0
イエカ類	259	0	259	66.8
キンパナガハシカ	1	0	1	0.3
オオクロヤブカ	11	0	11	2.8
計	388	0	388	

して最も少なかった（図2）。
ピーク時の捕集数は過去4年間と比較して最も少なかった（図2）。

表2. 太閤山ランドにおけるヒトスジシマカ雌成虫の調査時期別捕集数

調査時期 月 旬	採集数(匹) 地点1 地点2		計
5月	中	1 2	3
	下	0 0	0
6月	上	1 0	1
	中	1 0	1
	下	1 2	3
7月	上	10 6	16
	中	2 3	5
	下	4 0	4
8月	上	2 0	2
	中	3 0	3
	下	7 10	17
9月	上	14 4	18
	中	10 14	24
	下	11 2	13
10月	上	0 1	1
	中	0 0	0
	下	0 2	2
計		67 46	113

考察：県内におけるヒトスジシマカの2024年の発生は、5月中旬から10月中旬にかけて確認され、この期間にヒトへの吸血リスクがあることが示された。ヒトスジシマカの発生ピークの時期は地点や年次によって変動がみられるが、これまでの調査結果〔48〕を総合すると、ヒトスジシマカの発生が多くなるのは、7月から10月上旬の期間であった。この期間は、蚊媒介性感染症対策を講じる上で最も注意すべき期間である。

ヒトスジシマカの幼虫の発育速度は発生源の水

温に依存するため〔9〕、気温が高くなると成虫に羽化するまでの期間が短縮される。現在のところ、県内でヒトスジシマカの成虫が確認され始める時期は5月中旬から5月下旬であるが、今後、温暖化が進行した場合、時期が早まる可能性がある。また、ヒトスジシマカの発生源は竹の切り株などの小さな水溜まりであることから、発生数の増減には気温に加えて降雨の影響を受ける。そのため、ヒトスジシマカの発生状況は地域変動や年次変動が大きく、生息状況の調査は地域ごとに単年ではなく複数年にわたって行うことが望ましい。デング熱などの蚊媒介感染症対策を講じる際の基礎資料とするために、今後も継続してヒトスジシマカの発生状況を調査する必要がある。観光地においては、海外からの観光客によって蚊媒介ウイルスが持ち込まれる可能性がある。2014年には、観光客の多い東京都の代々木公園を中心にデング熱の国内流行が発生し、最終的に162例の国内感染例が報告された〔2〕。2014年に代々木公園などにおいて感染が拡大した要因としては、ヒトスジシマカの生息密度の高さに加え、長期間滞在する人や日常的に散歩を行う人などが多数存在したことが挙げられる。すなわち、ウイルス血症になったヒトを蚊が刺咬し、多くのウイルス保有蚊が発生したと考えられた。一方、県内観光地においては、これまでの調査の結果、ヒトスジシマカの生息密度が高く、かつ多くの人が日常的に訪問する地点はなかった。したがって、県内の観光地において蚊媒介感染症の地域流行が起こるリスクは低いと考えられた。そのため、今年度は県内観光地における蚊の生息状況の調査は行わなかった。しかしながら、ヒトスジシマカの生息密度は風通しなどわずかな環境条件の違いにより狭い場所であっても大きく異なるとの報告〔10〕があることから、今

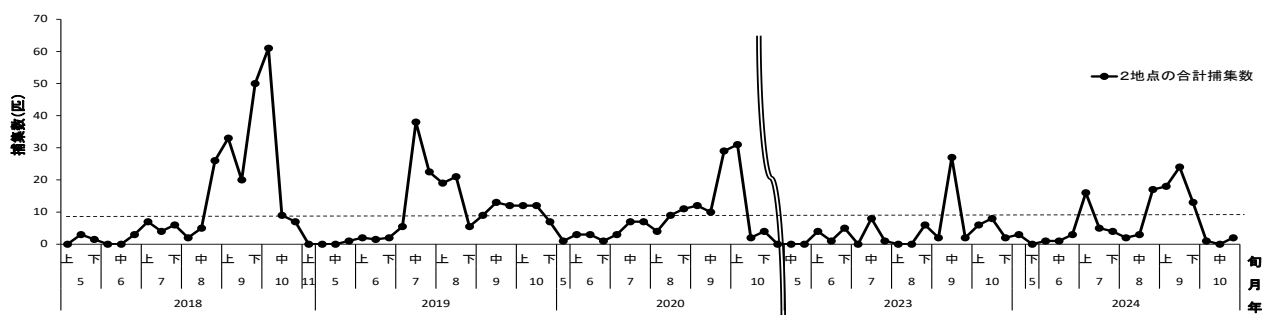


図2. 太閤山ランドにおけるヒトスジシマカ雌成虫の年次別季節消長（2018～2024年）

地点1,2ともにCDCトラップを用いて調査し、合計値をグラフにした。グラフ中の水平線（---）は捕集数が多いと判断する目安（10匹）を示した。2021～2022年は調査未実施。

後の環境条件の変化によってはその生息密度が高くなる可能性があり, そういった場合観光地における調査も考える必要がある.

文 献

1. 国立感染症研究所. (2020). IASR, 41, 94-96
2. 国立感染症研究所. (2015). IASR, 36, 33-34
3. 国立感染症研究所. (2020). IASR, 41, 89-93
4. 矢澤俊輔, 佐賀由美子, 寫田嵩久, 他. (2024). 富山県衛生研究所年報, 47, 69-71
5. 佐賀由美子, 寫田嵩久, 稲崎倫子, 他. (2021). 富山県衛生研究所年報, 44, 80-82
6. 佐賀由美子, 寫田嵩久, 稲崎倫子, 他. (2020). 富山県衛生研究所年報, 43, 101-103
7. 佐賀由美子, 寫田嵩久, 名古屋真弓, 他. (2019). 富山県衛生研究所年報, 42, 107-109
8. 佐賀由美子, 長谷川澄代, 稲崎倫子, 他. (2018). 富山県衛生研究所年報, 41, 109-113
9. 津田良夫. (2013). 蚊の観察と生態調査, 47-48, 北隆館
10. Tuda Y, Kim K. (2012). Med. Entomol. Zool., 63, 223-230